

# 『フィネガンズ・ウェイク』の父と娘

## — イッシー、レインボウ・ガールズ、ルチア・ジョイス

### Father and daughter in *Finnegans Wake*: Issy, Rainbow Girls, and Lucia Joyce

山田 久美子  
YAMADA Kumiko



ジョイス、アイルランド、モダニズム、統合失調症、  
モダンダンス

Joyce, Ireland, Modernism, schizophrenia, modern dance

#### Abstract

James Joyce spent sixteen years working on *Finnegans Wake* (1939), the night story of the Dublin inn-keeper HCE, his wife ALP, their twin sons Shem and Shaun, and their daughter Issy. It is the story of man's life, fall, and resurrection, and is written in an innovative style in which the English language transforms itself into a narrative written in words from over sixty-two languages around the world. One of the earliest entries related to *Finnegans Wake* in Joyce's "Buffalo Notebooks" suggests that the protagonist Humphrey Chimpden Earwicker (HCE) was first conceived as the father figure of Isolde, the legendary Irish princess. Issy appears under such names as Iz, Is, Isabel, Iss, Izzy, and from time to time splits into several personalities. She is the archetypal temptress as well as the muse in the Earwicker family.

While Joyce was writing *Finnegans Wake*, his daughter Lucia was struggling through an unhappy life of adolescent troubles, and her mental derangements were becoming more and more apparent. Joyce was not ready to admit that Lucia was suffering from schizophrenia, and pleaded rather that her actions were the results of her creativity. Over the years, materials regarding the Joyces have been opened to the public, offering evidence for the biographies of Joyce and his family. However, many, including most of the letters exchanged between Joyce and Lucia, have been lost or destroyed.

It should be noted that Lucia's mental breakdowns were concurrent with the violent reality of wars taking place in Ireland, Europe and other parts of the world since the turn of the century. As an exile, Joyce was living in the threat of conflict and destruction, and this set the tone of *Finnegans Wake*. The present paper seeks to examine passages from the text relevant to Lucia's career as a modern dancer and her growing anxiety, and to reconsider to what extent she may have offered inspiration to Joyce in composing the night language of *Finnegans Wake*.

## はじめに

ジェイムズ・ジョイス（1882-1941）最後の作品『フィネガンズ・ウェイク』（1939）はアイルランドの首都ダブリン郊外チャペリゾッドにある居酒屋の主ハンフリー・チムデン・イアウィッカー（HCE）とその家族をめぐる夢の物語である。妻のアナ・リヴィア・ブルーラベル（ALP）との間に双子の息子シェムとショーン、それに娘のイッシーがいる。人間の意識の中でも理性の支配しない部分を描き、創造・墮落・復活という人類の普遍的テーマを扱い、英語の枠組みを大きく超えた革新的な文体で書かれている。読者は「ウェイク語」とも呼ばれるこのナラティヴを読み解こうと協力してきた。近年はインターネットを利用した共同研究も進み、ローランド・マックヒュー（1945-）著 *Annotations to “Finnegans Wake” Third Edition*（2006）によれば、62もの言語が用いられていることが判明している。一方ジョイスが家族とともに1920年から1940年まで暮らしたパリは、各国からの亡命者が戦争の影におびえながら身を寄せあって生活する国際都市でもあった。そのような状況でジョイスは英語を解体し、世界各地の言語と文化を織り込むことによって、多重の意味を持つ叙述を実現した。なぜジョイスはこのような難解な文体を作り上げたのか。本稿はこの疑問を出発点としている。

『ユリシーズ』（1922）出版後しばらくすると、ジョイスの創作ノートには「トリスタンとイゾルデ」伝説に関する読書メモが続く（Crispi & Slotte, 2007）。ジョイスはこの伝説を枠組みとして次の作品を書くことを考え始めたようで、‘Is’s Pop and Mop’（Buffalo Notebook VI.B.3.061）というメモは、主人公HCEがイゾルデの父親として構想されたことを示唆する。ジョイスが『フィネガンズ・ウェイク』執筆に費やした十六年間はまた、娘ルチア（1907-1982）の思春期の精神の混乱を間近でみつめた日々でもあった。本稿では『フィネガンズ・ウェイク』に描かれるイッシーとその分身の少女たち、特にレインボウ・ガールズをめぐるテキストから、ルチア・ジョイスが創作に果たした役割の可能性について考察する。

## 1. イッシー

アダリーン・グラシーンは *Third census of “Finnegans Wake”: An index of the characters and their roles*（1977）イッシーの項で次のように述べている。

lizzy, Isabel, Isolde, Iss (dialectical “yes”), Is, Iz, etc. – daughter of HCE and Anna Livia, though at times her father is under the strong impression that he alone gave birth to her – e.g. like Zeus or Adam or the Artist. Issy is her mother’s past and future, her father’s reconciling babe, and the desired object of her warring brothers Shem and Shaun. FW’s ingénue lead, Issy is a triumph of feminine imbecility and sexual attraction – catty, inconsequent, affected, blithe, and treacherous Gerty Macdowell

playing at being an Irish princess and every young temptress everywhere. Also like Gerty, Issy has her flaw; she is mad, is a personality split into two temptresses, or seven rainbow girls, or twenty nine leap-year girls. In sum, Issy is diversity- “myriads of drifting minds” and her mother is unity, but shares the syllable “belle” with her daughter. (138-39)

「無邪気に誘惑し、いくつもの人格に分裂する無数の漂う心を持つ少女」イッシーは、二人に分裂するとチャペリソッド近くのフィーニックス公園で HCE を誘惑したとされる少女たちとなるが、また古代エジプト神話でオシリス神を守護するイシスとネフティスの姉妹神にも連なる。弟神のセトに殺されて木製の箱に閉じ込められナイル河に沈められてしまったオシリスの遺体を妹で妻でもあるイシスが探し出し、その後再びセトの手に落ちて切り刻まれ、エジプト中にばらまかれたものを拾い集めて再生させたという神話で（村治、21）、ナイル川上流アスワン近くのフィラエ島は、オシリスと呪力で交わったイシスがホルスを産んだ聖なる島とされる。だがオシリスは現世に蘇ることはできなかつたため、冥界の神として死者たちを守ることになった。エジプトで発掘された壁画や棺、『死者の書』などの多くにオシリス神の両側に待るイシス神とネフティス神の姿が描かれている。

ジョイスはアイルランドと同じ英国の植民地支配下にあったエジプトには早くから関心を持ったようである。1907年にトリエステで行ったイタリア語による講演「アイルランド—聖人と賢者の島」の中で「このように [英国よりも進んだ文明を誇る] 過去に訴えることが有効であるならば、カイロの農夫たちにはイギリス人観光客の荷物運びをつとめることをよしとしない権利が大いにあろう」(*Critical Writings*, 173) と、過去を抛り所にしようとする故郷アイルランドの文芸復興運動を戒めている。その後パリで知り合ったアメリカ人、ブラック・サン・プレス社のハリ・クロズビー（1898-1929）を通じて、ジョイスはエジプトの『死者の書』に親しむことになる。本稿では分裂したイッシーのひとつの姿としてのイシス神とネフティス神に言及するにとどめ、『死者の書』と『フィネガンズ・ウェイク』の関係については稿を改めることとしたい。

イッシーはまた伝説のアイルランド王女イゾルデであり、HCEの居酒屋があるチャペリソッドの地名もイゾルデに由来する。リヒャルト・ワーグナー（1813-83）はオペラ「トリスタンとイゾルデ」（1865年初演）を作曲するにあたり、中世ドイツの詩人ゴットフリート・フォン・シュトラースブルグがケルトの伝説をもとに書いた長詩を大胆に変えて、自ら台本を書いた。マルケ王に嫁ぐためにコーンウォールに向かう船上でイゾルデは侍女のはかりごとにより、死の飲み物と信じて愛の飲み物をトリスタンとともに飲み干す。二人の道ならぬ恋は宿命であり、死によって成就する。オペラ「トリスタンとイゾルデ」にはまた、ワーグナーの創作を支えたチューリッヒの実業家オットー・ヴェーゼンドルクとその妻マティルデとの三角関係が投影されているともいわれる。イゾルデとしてのイッシーは誘惑する女であると同時に詩神でもある。

## 2. レインボウ・ガールズ

『フィネガンズ・ウェイク』第二部第一章、イアウィッカー家の子どもたちが色あてゲームに興じる中、アリス役を演じた女優 Isa Bowman を思わせる少女が登場する。

Poor Isa sits a glooming so gleaming in the gloaming; the tincelles a touch tarnished  
wind no lovelinoise aaround her swan's. Hey, lass! Woefear gleam she so glooming,  
this pooripathete Isolde? Her beauman's gone of a cool. Be good enough to  
symperise. If he's at anywhere she's therefor to join him. If it's to nowhere she's going  
to too. Buf if he'll go to be a son to France's she'll stay daughter of Clare. Bring tansy,  
throw myrtle, strew rue, rue, rue. She is fading out like Journee's clothes so you can't  
see her now. (226)

引用部分は『フィネガンズ・ウェイク』出版に先立って逐次出版された断章のひとつ『ミック、ニックとマギーたちのマイム』（1934）とほぼ重なる。ジョイスは1930年にハリエット・ショー・ウィーヴァーに宛てた手紙の中で、この章が自身のダブリンでの子ども時代の遊び「天使と悪魔、または色あてゲーム」を下敷きにしていると説明している（*Letters I*, 295）。マイムとは無言劇だが、三人の子どもたちのうちシエムはグラッグすなわち悪魔・ニック役で、少女たちのなぞかけに正しい色で答えなければならない。ショーンはチャフすなわち大天使ミカエル・ミック役、悪魔の闇に対する光である。イッシーはフローラたち、レインボウ・ガールズ、マギーたちなど様々に姿と人格を変えて、グラッグをからかう役を演ずる。「哀れなイゾルデ」（*pooripathete Isolde*）はオフィーリアのように草花を摘みながら冷淡になった恋人を思い、黄昏の中で次第に姿が見えなくなる。シエムとショーン扮するチャフとグラッグが歌いだすと、アリスのような衣装を着けた愛らしい少女たちが天使の花綱のように輪になって、「跳んだりはねたり」（*leap*）身をそらしたり踊りはじめる。

So and so, toe by toe, to and fro they go round, for they are the ingelles, scattering  
nods as girls who may, for they are an angel's garland.

Catchmire stockings, libertyed garters, shoddys shoes, quicked out with selver.  
Pennyfair caps on pinnyfore frocks and a ring on her fomefing finger. And they leap  
so looply, looply, as they link to light. And they look so loovelily, loovelit, noosed in a  
nuptious night. Withasly glints in. Andecoy glants out. They ramp it a little, a lessle, a  
lissle. Then rompride round in rout.

Say them all but tell them apart, cadenzando coloratura! R is Rubretta and A is  
Arancia, Y is for Yilla and N for greeneriN. B is Boyblue with odalisque O while W

waters the fleurettes of novembrance. Though they're all but merely a schoolgirl yet these way went they. I'th'view o'th'avignue dancing goes entrancing roundly. (226)

赤、オレンジ、黄、緑、青などの色にちなむ名前の七人の少女が繋がると頭文字は RAINBOW (虹) となる。こうして少女たちがひとつになったり分かれたりしながら踊る様子が、頭韻を多用したリズムカルな文体で描かれている。ここには度重なる転居により孤独な少女時代を過ごし、家族間ではイタリア語を話し、それ以外の場では使用言語をくるくると自在に変えたといわれ、『ユリシーズ』出版後は著名作家の娘としてパリのボヘミアンたちの相手となったルチアが、言語によらない自己表現としてモダンダンスに生きがいを見出した姿が反映されているように思われる。少女たちのなぞの正しい答えは「ヘリオトロープ」、薄紫色の花の咲く低木である。

『フィネガンズ・ウェイク』最終章、グレンダロッホに隠遁する聖ケヴィンに呼びかけるこだまは合わせて二十九人、閏年 (leap year) の乙女たちである。

Bring about it to be brought about and it will be, loke, our lake lemanted, that greyt lack, the citye of Is is issuant (atlanst!), urban and orbal, through seep froms umber under wasserres of Erie.

Lough!

Hwo! Hwy, dairmaidens? Asthoreths, assay! Earthsigh to is heavened.

Hillsengals, the daughters of the cliffs, responsen. Longsome the samphire coast. From thee to thee, thoo art it thoo, that thouest there. The like the near, the liker nearer. O sosay! A family, a band, a school, a clanagirls. Fiftines andbut fortines by novanas andor vantads by octettes ayand decadendecads by a lunary with last a lone. Whose every has herdifferent from the similies with her site. *Sicut campanulae petalliferentes* they coroll in caroll round Botany Bay. A dweam of dose innocent dirly dirls. Keavn! Keavn! (601)

さまざまな人格に分裂しながら踊る少女たちは『フィネガンズ・ウェイク』にたびたび登場する主要なモチーフのひとつであり、無垢でみだらな少女たち (innocent dirly dirls) のイメージからは父親を誘惑する娘という近親相姦的な父娘関係を読み取ることもできよう。

### 3. ルチア・ジョイス

実際のジョイスと娘ルチアの関係はどのようなものであったのか。ジョイスの意向を受けて、またジョイスの死後は遺族への配慮から、長い間ルチアについては沈黙が守られていた。ジョイスの生前に公認の伝記 *James Joyce* (1939) を書いたハーバート・ゴーマンは「娘ルチアは健康

上の理由から離れて暮らすことになった」(341)と述べるにとどまる。リチャード・エルマンは *James Joyce* (1959) で、書簡や関係者への聞き取り調査等をもとにルチアの成育、恋愛問題、病歴などに言及している。エルマンによれば、ルチアはサミュエル・ベケットへの失恋、ルシー・レオンの弟アレキサンダー・ポニソフスキーとの交際・婚約・婚約破棄などを経て、次第に精神の乱れが目立つようになり、1932年には統合失調症が顕著になったという(663)。この頃のジョイスについてエルマンは次のように述べる。

He had always before put his writing beyond all other considerations; now, as an expression of guilt, he put his daughter's health beyond his art, and punished himself for past obtuseness by writing hardly at all and by devoting his thoughts frantically and impotently to his daughter. (662-63)

生涯作家として生きたジョイスが自責の念からルチアの治療のために金と時間を惜しみなく使ったことは、個人秘書をつとめたポール・レオンの妻ルシーの回想からもうかがえる(13)。ジョイス周辺の人たちがルチアの行状に苛立ち、病状が悪化すると施設や治療法を探すのに奔走したのは、『*フィネガンズ・ウェイク*』完成を助けるためという感をまぬがれないのもまた事実であろう。

2004年にキャロル・シュロツスがジョイスの遺族との法廷闘争を経て *Lucia Joyce: to dance in the wake* を出版した。シュロツスは資料を掘り起こし、ルチアがダンサーとして表舞台に登場し、やがて挫折して退場する姿を描いている。それによるとルチアはダンス・グループ「リズムと色の七人」(*Les six de rythme et couleur*)の一員として、1926年1月にシャンゼリゼ劇場でデビュー、翌27年にはイタリア公演を行った。本書には28年に自ら振り付けを担当した「金の橋」(*Le pont d'or*)を踊る写真などが掲載されている。この頃パリの一家を訪問したジョイスの妹アイリーン・シャウレックは、父が執筆したり歌ったりする間「ルチアは背景で静かに踊っていた」と証言しているという(152)。

ダンサーとしてのルチアの頂点はシュロツスによれば1929年5月パリのバル・ビュリエ劇場で開催されたダンス・コンテストの最終選考会であっただろうか。銀の魚の衣装を着けたルチアは観客を魅了し、ベケットはこのときの写真を終生手元に置いていたという(173)。その後ルチアはダンス教師として自立しようと名刺を作ったりもしているが、ドイツ南西部ダルムシュタットに開校予定のエリザベス・ダンカンのダンス・スクールへの誘いを断ることになる。ダンサーになることをあきらめたルチアはジョイスの勤めもありデザインに転向し、ジョイスの詩集『*ポウムズ・ペニーチ*』(1930)の装飾頭文字をデザインしたり、『*ミック、ニックとマギーたちのマム*』(1934)の表紙挿絵を描いたりなどするが、次第に奇行が目立つようになる。シュロツスは『*フィネガンズ・ウェイク*』執筆に加えて、父ジョイスの眼病、母ノラの子宮癌、兄ジョルジオの人妻ヘレン・フライシュマンとの恋愛と結婚などの要因により、ルチアがダンスを続ける環

境ではなかったという。統合失調症をうかがわせる軽度の意識障害や不眠などの症状、部屋に火をつける、夜中に徘徊するなどといった行動が記されているものの、シュロツスはルチアの言動を芸術家としての自立の道を断とうとする大人たちへの義憤によるものととらえ、精神障害があったとは認めない立場をとる。だがルチアが1951年から1982年に亡くなるまで入院していた英国ノーザンプトンの聖アンドリュー病院の記録が得られていないこと、ダンサーとしてのキャリアについても推測に基づく記述が多いことなどから、説得力のあるルチア論になっているとはいえない。

ルチアの精神障害について研究者によって見解が異なってきたのには、統合失調症の診断基準が長い間曖昧であったことが理由としてあげられよう。統合失調症 (schizophrenia) とは1911年にスイスの精神科医オイゲン・ブローラーが用いた名称で、思考過程のさまざまな要素の統合が失調しているという意味である。日本語訳は2002年にそれまでの「精神分裂病」から「統合失調症」に変更された。1980年にDSM (精神障害の診断・統計マニュアル) がアメリカで採用され、1987年、1994年に改訂されたことにより診断基準がより明確になったといわれる。残された記録などから過去に遡って診断を下すのは難しいには違いないが、ルチアが統合失調症に苦しんだことはほぼ間違いないように思われる。その特異な成育環境のため、母語といえる言語がなかったともいえるルチアの統合失調症と『フィネガンズ・ウェイク』の難解なナラティブとの間にどの程度の関連があるのか。ジョイスの文体の逸脱は前作『ユリシーズ』第十五挿話などにきざしがみられるものの、背景には新たな要因があるように思われる。

『フィネガンズ・ウェイク』の創作過程を中心に研究するフィン・フォードは *Lightning becomes Electra: Violence, inspiration, and Lucia Joyce in Finnegans Wake* (2002) で、次のように述べる。

Rather than make a general account of Lucia's role, I hope to engage with *Finnegans Wake* in kind by playing, just as it does, associative word-games, by disentangling and unpacking several small references. The results will indicate three ways in which Lucia's presence can be felt, all present in my title, first, through a particular archetype of female violence – hence “Electra,” the matricidal daughter of the Greek commander Agamemnon – and second, as a sudden flash of inspiration, of *éclaircissement*, hence “lightning.” Third, a genetic method will trace how these phenomena developed over time as Joyce wrote and how the changes in Lucia's life affected the way Joyce figured them: hence, “Lightning, *becomes* Electra.” Such a method involves contextualizing many of the quotations next to the dates given in the *James Joyce Archive* for the manuscript drafts and proofs. (659)

ルチアの存在は第一に「女性による暴力の原型、母親殺しのエレクトラ」として、第二に「インスピレーションの稲妻」として、第三に後者から前者へと変化していく様子に感じられるという。

実際にエルマンやシュロスの伝記によれば、ジョイスが『フィネガンズ・ウェイク』を半分近く書き上げた1932年2月の誕生祝いの席でノラに椅子を投げつけたのが契機となって、ルチアは精神障害者のための療養所に収容され、その後入院を繰り返すことになったのである。

ジョイスがルチアとどのような会話や手紙を交わしていたのか、ルチアの後見人となったウィーヴァーが親子間の書簡のほとんどを破棄したとされる今となっては検証する術はない（シュロス、22）。いくつもの異なる言語の間に垣根がないこと、ことばの分裂や増殖などは、ルチアの発話や手紙にも見られたのだろうか。スチュワート・ギルバートは『ジョイス書簡集』序文で、ジョイスからルチアに宛てたイタリア語書簡について次のように述べる。

For the letters to Lucia Joyce, especially, are written in an allusive, familiar, often playful style; there was in fact a sort of 'little language' (in the Swiftian sense) which Lucia and her father used between themselves. (40)

ルチアは言葉遣いだけでなく言動も斬新であったが、それはジョイス自身がとらわれていたカトリック倫理に縛られずに育ったからであり、父ジョイスには新鮮に映ったことだろう。娘を病気とは認めようとしなかったジョイスは、むしろその言動にインスピレーションを得て、ルチアとのコミュニケーションを模した言語によって人類の歴史の物語を書いたとも考えられる。『フィネガンズ・ウェイク』では英語を中心に多くの言語が分裂しては統合し連なり合い、重層的なイメージの濃密な文体を作り出しているが、ジョイスとルチアの間でこれに似た言語によるコミュニケーションが成立していたと考えるのは想像に難くない。描かれているのは夫婦、親子、兄弟などさまざまな人間の関係と確執、願望と不安である。いわゆるウェイク語は二人の間で交わされたことばにさらに意味を重ねたものではないだろうか。

だがルチアの精神状態が次第に不安定になり、コミュニケーションが困難になるのを父親は暗澹たる思いで見つめたに違いない。人の勧めもあってルチアをチューリッヒの心理学者カール・グスタフ・ユング（1875-1961）のところへ連れて行くことになった。ユングは1932年『ヨーロッパ評論』にジョイスの『ユリシーズ』批評を発表していた。その中でユングは『ユリシーズ』の精神状態と精神分裂症の状態との相似を認めることは、素人にとってもさして困難ではあるまい（149）とジョイスの作品に見られる精神分裂症的傾向を指摘しながらも「全編をつらぬく傾向は、かりそめの美に溺れようとする度々の誘惑にもかかわらず、概ね保持されている。これらの特徴は、通常の精神病患者には見られないものだ。」「ともあれ、私は『ユリシーズ』を、精神分裂症の産物だと断言するつもりはない。」と、『ユリシーズ』を批判しつつも正確に捉えている。エルマンによればユングはルチアは父親の *anima inspiratrix* であると次のように述べたという。

When the psychologist pointed out schizoid elements in poems Lucia had written,



Joyce, remembering Jung's comments on *Ulysses*, insisted they were anticipations of a new literature, and said his daughter was an innovator not yet understood. Jung granted that some of her portmanteau words and neologisms were remarkable, but said they were random; she and her father, he commented later, were like two people going to the bottom of a river, one falling and the other diving. (679)

スイス、フランス、イギリスなどで精神科の受診・入院歴があるルチアは、1934年に四ヶ月に渡りユングの面接を受けたが、結果的にユングはルチアの信頼を得ることが出来なかった。だがジョイスの創作とルチアとの関係についてユングは核心に触れているように思われる。

ジョイスにとって危機的状況をもたらしたのは、娘ルチアの発病だけではなく、祖国アイルランドの独立闘争とそれに続く内戦、日清戦争や日露戦争など列強を脅かす勢力の台頭、ナチスのポーランド侵攻からフランス占領へと続いた戦争であった。ヨーロッパ全体への戦争拡大は、パリで暮らすジョイスの生活を脅かすようになった。ルチアが最後に入院してから二年半後、戦争の足音が忍び寄る中でジョイスは快復のきざしが見えない娘へのオマージュとして『フィネガンズ・ウェイク』を完成し、出版を急いだ。やがて戦火を避けてパリから地方へ、さらにフランス国外へ疎開する必要に迫られるが、当時の法律では家族が病院から患者を移すことが難しかったため、ルチアをドイツ占領地域に残すことを余儀なくされ、ジョイスは家族とともにスイスに脱出した。1941年に急病のためチューリッヒで急逝したジョイスであるが、ルチアのこととは最期まで頭から離れなかったであろう。

#### 4. 息子なる夫へ娘なる妻より

第二部第一章、シエム扮するグラッグはプランクイーンのようになぞをかける母の過干渉に悩まされる。一方イッシーは母ALPの未来でもある。

Ah ho! This poor Glugg! It was so said of him about of his old fontmouther. Truly deplurabel! A dire, O dire! And all the freightfullness whom he inhebited after his colline born janitor. Sometime towerable! With that hehry antlets on him and the baublelight bulching out of his sockets whiling away she sprankled his allover with her nocoes of interregnation: How do you do that lack a lock and pass the poker, please? And bids him tend her, lute and airly. Sing, sweetharp, thing to me anone! So that Glugg, the poor one, in that limbopool which was his subnsciousness he could scares of all knotknow whither his morrder had bourst a blabber or if the vogalstones that hit his tynpan was that nearly his skoll missed her. Misty's trompe or midst his floating? Ah, ho! Cicely, awe! (224)

『フィネガンズ・ウェイク』最終章で父なる海に注ぎ込もうとする孤独な母なるリフィ川は回想の中で、ウィックロウの山の泉から生まれて大海に出会うまで変わりつつある自分を思うが、息子と夫 (sonhusband) はもはや区別できない。

How you said how you'd give me the keys of me heart. And we'd be married till delth to uspart. And though dev do espart. O mine! Only, no, now it's me who's got to give. As duv herself div. Inn this linn. And can it be it's nnow fforvell? Illas! I wisht I had better glances to peer to you through this baylight's growing. But you're changing, acoolsha, you're changing from me, I can feel. Or is it me is? I'm getting mixed. Brightening up and tightening down. Yes, you're changing, sonhusband, and you're turning, I can feel you, for a daughterwife from the hills again. (626-27)

そして娘なる妻 (daughterwife) はダンスを踊る娘が自分の乳房をしゃぶっていた頃を思う。

Nor for all our wild dances in all their wild din. I can seen meself among them, allaniuvia pulchrabelled. How she was handsome, the wild Amazia, when she would seize to my other breast! And what is she weird, haughty Niluna, that she will snatch from my ownest hair! For 'tis they are the stormies. Ho hang! Hang Ho! And the clash of our cries till we spring to be free. Auravoles, they says, never heed of your name! But I'm loothing them that's here and all I lothe. Loonely in me loneness. For all their faults. I am passing out. O bitter ending! I'll slip away before they're up. They'll never see. Nor know. Nor miss me. And it's old and old it's sad and old it's sad and weary I go back to you, my cold father, my cold mad father, my cold mad feary father, till the near sight of the mere size of him, the moyles and moyles of it, moananoaning, makes me seasilt saltsick and I rush, my only, into your arms. (627-28)

こうして sonhusband と daughterwife はひとつになって姿を消し、終わりは始まりとなる。

## おわりに

ルチア・ジョイスの統合失調症がどのようなものであったのか、ジョイスの叙述との関連で検証することを試みたが、ルチア関係の一次資料がほとんどない中、予想通り難しい研究であった。だが『フィネガンズ・ウェイク』のテキストと生成過程との関連について知れば知るほど、ルチアが果たした役割の大きさを再認識することになった。

\*本稿は2008年6月14日、日本ジェイムズ・ジョイス協会第二十回大会シンポジウム「ジョイスの少女たち」における口頭発表をもとに加筆したものである。

#### 参考文献

- Crispi, Luca and Slote, Sam ed. (2007). *How Joyce wrote "Finnegans Wake": A chapter-by-chapter genetic guide*. Madison: Univ. of Wisconsin Press.
- Deane, Vincent et al. ed. (c2001). *The "Finnegans Wake" notebooks at Buffalo*. Notebook VI.B.3. Brepols Publishers.
- Ellmann, Richard. (1982). *James Joyce*. Oxford: Oxford Univ. Press.
- Fordham, Finn. (2002). Lightning becomes Electra: Violence, inspiration, and Lucia Joyce in *Finnegans Wake*. *James Joyce Quarterly* 39-4 (summer).
- Gilbert, Stuart. (1993). *Reflections on James Joyce*. Austin: Univ. of Texas Press.
- Gilbert, Stuart ed. (1966). *The letters of James Joyce* Vol. I. New York: The Viking Press.
- Glasheen, Adaline. (1977). *Third census of "Finnegans Wake": An index of the characters and their roles*. Berkeley: Univ. of California Press.
- Gorman, Herbert. (1941). *James Joyce*. London: Bodley Head.
- Joyce, James. (1939, 1975). *Finnegans Wake*. London: Faber & Faber.
- Joyce, James. (1959). *Critical Writings*. New York: Viking Press.
- ユング、C. G. (1970) 『ユング著作集 3 こころの構造』 日本教文社
- Leon, Lucie. (1950). *James Joyce and Paul L. Leon: The story of a friendship*. New York: The Gotham Book Mart.
- McHugh, Roland. (2006). *Annotations to "Finnegans Wake"*. Third Edition. Baltimore: The Johns Hopkins Univ. Press.
- 宮田恭子著 (2006) 『ジョイスのパリ時代—「フィネガンズ・ウェイク」と女性たち』 みすず書房
- 村治笙子著 (2002) 『図説 エジプトの「死者の書」』 河出書房新社
- Shloss, Carol Loeb. (2004). *Lucia Joyce: To dance in the wake*. London: Bloomsbury.
- リヒャルト・ワーグナー著 高辻知義訳 (1985, 1992) 『トリスタンとイゾルデ』 新書館

